

日本現代文學全集・講談社版 82

梶 井 基 次 郎
田 畑 修 一 郎
中 島 敦 集

日本現代文學全集

82

梶井基次郎・田畑修一郎・中島敦集

編 集

伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉



昭和39年10月10日 印刷

昭和39年10月19日 發行

定 價 500圓

© KODANSHA 1964

著 者

梶 井 基 次 郎
田 畑 修 一 郎
中 島 敦

發 行 者 野 間 省 一

印 刷 者 北 島 織 衛

發 行 所 株式會社 講 談 社

東京都文京區音羽町3~19
電話東京(942) 1111 (大代表)
振替東京 3 9 3 0

印	刷	大日本印刷株式會社
寫	製	株式會社 興 陽 社
版	本	株式會社 大 進 堂
製	函	株式會社 岡 山 紙 器 所
背	革	株式會社 第一 紙 藝 社
表紙	クロ	株式會社 石 井
口	綸	日本クロス工業株式會社
文	用	日本加工製紙株式會社
函	貼	本州製紙株式會社
見	返	安倍川工業株式會社
用	紙	三菱製紙株式會社
扉	用	神崎製紙株式會社

亂丁本はお取りかえいたします。

梶井基次郎集 目次

卷頭寫眞

筆蹟

檸檬……………	七
城のある町にて……………	二〇
泥濘……………	二四
路上……………	二九
橡の花……………	三
過古……………	三九
雪後……………	四〇
ある心の風景……………	四五
Kの昇天……………	五一

冬の日……………	五
蒼穹……………	三
算の話……………	五
器樂的幻覺……………	六
冬の蠅……………	六
ある崖上の感情……………	七
櫻の樹の下には……………	八
愛撫……………	八
闇の繪卷……………	六
交尾……………	八
のんきな患者……………	九
書翰抄……………	一〇三

作品解説……………	伊藤 整	三〇
梶井基次郎入門……………	瀬沼茂樹	三六
年 譜……………		三九
参考文献……………		四二

田畑修一郎集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

鳥羽家の子供……………一三五

南方……………一四〇

石ころ路……………一四八

略 圖……………一六〇

故 事……………一七〇

黒 白……………一七二

赤松谷……………一八〇

木椅子の上で……………一九二

蜥蜴の歌……………二〇六

起 伏……………二六

桃林にて……………三三

作品解説……………伊藤 整 三六

田畑修一郎入門……………瀬沼茂樹 三七

年 譜……………四〇〇

参考文献……………四二

中島敦集目次

卷頭寫眞

筆蹟

光と風と夢	三九
斗南先生	二九
虎狩	三〇五
山月記	三三〇
狼疾記	三三四
名人傳	三三九
弟子	三四三
李陵	三五六
章魚木の下で	三七六

作品解説	伊藤 整 三六
------	---------

中島敦入門	瀬沼茂樹 三六
-------	---------

年譜	四七
----	----

参考文献	四四
------	----

梶井基次郎集

愛撫

梶井基次郎

猫の耳といふものはまことに可笑しなものである。薄べったくて、冷たくて、竹の子の皮のやうに、表は絨毛が生えておて、裏はピカピカしてゐる。硬いやうな、柔らかいやうな、なんともいへない一種特別の物質であ

檸檬

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終壓へつけてゐた。焦躁と云はうか、嫌惡と云はうか——酒を飲んだあとに宿醉があるやうに、酒を毎日飲んでゐると宿醉に相當した時期がやつて来る。それが來たのだ。これはちよつといけなかつた。結果した肺尖カタルや神經衰弱がいけないのではない。また脊を焼くやうな借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がならなくなつた。蓄音器を聴かせて貰ひにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上つてしまひたくなる。何かが私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街を浮浪し續けてゐた。

何故だかその頃私は見すばらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えてゐる。風景にしても壊れかかつた街だとか、その街にしても他處他處しい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあつたりがらくたが轉つてあつたりむさくるしい部屋が覗いてゐたりする裏通りが好きであつた。雨や風が蝕んでやがて土に歸つてしまふ、と云つたやうな趣きのある街で、土塀が崩れてゐたり家並が傾きかかつてゐたり——勢ひのいいのは植物だけで、時とするとびつくりさせるやうな向日葵があつたりカンナが咲いてゐたりする。

時どき私はそんな路を歩きながら、不圖、其處が京都ではなくて京都から何百里も離れた仙臺とか長崎とか——そのやうな市へ今自

分が來てゐるのだ——といふ錯覺を起さうと努める。私は、出来ることなら京都から逃げ出して誰一人知らないやうな市へ行つてしまひたかつた。第一に安靜。がらんとした旅館の一室。清淨な蒲團。匂ひのいい蚊帳と糊のよくきいた浴衣。其處で一月ほど何も思はず横になりたい。希はくは此處が何時の間にかその市になつてゐるのだつたら。——錯覺がやうやく成功しはじめると私はそれからそれへと想像の繪具を塗りつけてゆく。何のことはない、私の錯覺と壊れかかつた街との二重寫しである。そして私はその中に現實の私自身を見失ふのを樂しんだ。

私はまたあの火花といふ奴が好きになつた。火花そのものは第二段として、あの安つばい繪具で赤や青や、様ざまの縞模様を持つた火花の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき。それから鼠火花といふのは一つづつ輪になつてゐて箱に詰めてある。そんなものが變に私の心を唆つた。

それからまた、びいどろといふ色硝子で鯛や花を打ち出してあるおはじきが好きになつたし、南京玉が好きになつた。またそれを嘗めてみるのが私にとつて何ともいへない享樂だつたのだ。あのびいどろの味ほど幽かな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱られたものだが、その幼時のあまい記憶が大きくなつて落魄れた私に蘇つてくるせめだらうか、全くあの味には幽かな爽かな何となく詩美と云つたやうな味覺が漂つてゐる。

察しはつくだらうが私にはまるで金がなかつた。とは云へそんなものを見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰めるためには贅澤といふことが必要であつた。二錢や三錢のもの——と云つて贅澤なもの。美しいもの——と云つて無氣力な私の觸手に寧ろ媚びてくるもの。——さう云つたものが自然私を慰めるのだ。

生活がまだ蝕まれてゐなかつた以前私の好きであつた所は、例へば丸善であつた。赤や黄のオードロンやオードキン。洒落た切子細工や典雅なロココ趣味の浮城様を持つた琥珀色や翡翠色の香水

煙管、小刀、石鹼、煙草。私はそんなものを見るのに小一時間も費すことがあつた。そして結局一いい鉛筆を一本買ふ位の贅澤をするのだつた。然し此處ももうその頃の私にとつては重くるしい場所にすぎなかつた。書籍、學生、勘定臺、これらはみな借金取の亡靈のやうに私には見えるのだつた。

ある朝——その頃は甲の友達から乙の友達へといふ風に友達の下宿を轉々として暮してゐたのだが——友達が學校へ出てしまつたあとの空虚な空氣のなかにぼつねんと一人取り残された。私はまた其處から彷徨ひ出なければならなかつた。何かが私を追ひたてて、そして街から街へ、先に云つたやうな裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立ち留つたり、乾物屋の乾蝦や棒鰯や湯葉を眺めたり、たうとう私は二條の方へ寺町を下り、其處の果物屋で足を留めた。此處でちよつと其の果物屋を紹介したいのだが、その果物屋は私の知つてゐた範圍で最も好きな店であつた。其處は決して立派な店ではなかつたのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。果物はかなり勾配の急な臺の上に並べてあつて、その臺といふのも古びた黒い漆塗りの板だつたやうに思へる。何か華やかな美しい音楽の快速調の流れが、見る人を石に化したといふゴルゴンの鬼面——的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴォリウムの凝り固まつたといふ風に果物は並んでゐる。青物もやはり奥へゆけばゆくほど堆高く積まれてゐる。——實際あそこの人參葉の美しさなどは素晴らしいかつた。それから水に漬けてある豆とか葱姑だとか。

また其處の家の美しいのは夜だつた。寺町通は一體に賑かな通りで——と云つて感じは東京や大阪よりはずつと澄んだのであるが——飾窓の光がおびただしく街路へ流れ出てゐる。それがどうした譯かその店頭の周圍だけが妙に暗いのだ。もともと片方は暗い二條通に接してゐる街角になつてゐるので、暗いのは當然であつたが、その隣家が寺町通りにある家にも拘らず暗かつたのはつきりしない。然しその家が暗くなかつたら、あんなにも私を誘惑するには至らなかつたと思ふ。もう一つはその家の打ち出した廂^{きよう}なのだが、その廂が眼深に冠つた帽子の廂のやうに——これは形容といふよりも、「おや、あそここの店は帽子の廂をやけに下げてゐるぞ」と思はせるほどのので、廂の上はこれも眞暗なのだ。さう周圍が眞暗なため、店頭に點けられた幾つもの電燈が驟雨のやうに浴せかける絢爛は、周圍の何者にも奪はれることなく、肆にも美しい眺めが照らし出されてゐるのだ。裸の電燈が細長い螺旋棒をきりきり眼の中へ刺し込んで來る往來に立つて、また近所にある鑑屋の二階の硝子窓をすかして眺めたこの果物屋の眺めほど、その時どきの私を興がせたまのは寺町の中でも稀だつた。

その日は何時になくその店で買物をした。といふのはその店には珍らしい檸檬が出てゐたのだ。檸檬などごくありふれてゐる。が其の店といふのも見すばらしくはないまでもただあたりまへの八百屋に過ぎなかつたので、それまであまり見かけたことはなかつた。一體私はあの檸檬が好きだ。レモンエロウの繪具をチューブから搾り出して固めたやうなあの單純な色も、それからあの丈の詰つた紡錘形の恰好も。——結局私はそれをつだけ買ふことにした。それからの私は何處へどう歩いたのだらう。私は長い間街を歩いてゐた。始終私の心を壓へつけてゐた不吉な塊がそれを握つた瞬間からいくらか弛んできたと見えて、私は街の上で非常に幸福であつた。あんなに執拗かつた憂鬱が、そんなものの一顆で紛らされる——或ひは不審なことが、逆説的な本當であつた。それにしても心といふ奴は何といふ不思議な奴だらう。

その檸檬の冷たさはたとへやうもなくよかつた。その頃私は肺尖を悪くしてゐていつも身體に熱が出た。事實友達の誰彼に私の熱を見せびらかすために手の握り合ひなどをしてみるのが、私の掌が誰れのよりも熱かつた。その熱のせみだつたのだらう、握つてゐる掌から身内に浸み透つてゆくやうなその冷さは快いものだつた。

私は何度も何度もその果實を鼻に持つて行つては嗅いでみた。そ

れの産地だといふカリフォルニアが想像に上つて来る。漢文で習つた「賣柑者之言」の中に書いてあつた「鼻を撲つ」といふ言葉が斷ぎれに浮んで来る。そしてふかふかと胸一杯に匂やかな空氣を吸ひ込めば、つゞぞ胸一杯に呼吸したことになつた私の身體や顔には溫い血のほとぼりが昇つて来て何だか身内に元氣が目覺めて來たのだつた。……

實際あんな單純な冷覺や觸覺や嗅覺や視覺が、ずつと昔からこればかり探してゐたのだと云ひたくなつたほど私にしつくりしたなんて私は不思議に思へる——それがあの頃のことなんだから。

私はもう往來を輕やかな昂奮に彈んで、一種誇りかな氣持さへ感じながら、美的裝束をして街を闊歩した詩人のことなど思ひ浮べては歩いてゐた。汚れた手拭の上へ載せてみたりマントの上へあてがつてみたりして色の反映を量つたり、またこんなことを思つたり、

——つまりは此の重さなんだな。

その重さこそ常づね尋ねあぐんでゐたもので、疑ひもなくこの重さは總ての善いもの總ての美しいものを重量に換算してきた重さであるとか、思ひあがつた諸誼心からそんな馬鹿げたことを考へてみたり——何がさて私は幸福だつたのだ。

何處をどう歩いたのだらう、私が最後に立つたのは丸善の前だつた。平常あんなに避けてゐた丸善がその時の私には易やすと入れるやうに思へた。

「今日は一つ入つて見てやらう」そして私はづかづか入つて行つた。

然しどうしたことだらう、私の心を充してゐた幸福な感情は段々逃げて行つた。香水の罐にも煙管にも私の心はのしかかつてはゆかなかつた。憂鬱が立て罩めて来る、私は歩き廻つた疲勞が出て來たのだと思つた。私は畫本の棚の前へ行つて見た。畫集の重たいのを取り出すのさへ常に増して力が必要な！と思つた。然し私は一冊づつ抜き出しては見る、そして開けては見るのだが、克明にはぐつ

てゆく氣持は更に湧いて來ない。然も呪はれたことにはまた次の一冊を引き出して来る。それも同じことだ。それでゐて一度バラバラとやつてみなくては氣が濟まないのだ。それ以上は堪らなくなつて其處へ置いてしまふ。以前の位置へ戻すことさへ出來ない。私は何度もそれを繰り返した。たうとうおしまひには日頃から大好きだつたアングルの橙色の重い本まで尙一層の堪へ難さのために置いてしまつた。——何といふ呪はれたことだ。手の筋肉に疲勞が残つてゐる。私は憂鬱になつてしまつて、自分が抜いたまま積み重ねた本の群を眺めてゐた。

以前にはあんなに私をひきつけた畫本がどうしたことだらう。一枚一枚に眼を晒し終つて後、さてあまりに尋常な周圍を見廻すときのあの變にそくはない氣持を、私は以前には好んで味はつてゐたものであつた。……

「あ、さうださうだ」そのとき私は袂の中の櫛櫛を憶ひ出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この櫛櫛で試してみたら。「さうだ」

私にまた先程の輕やかな昂奮が歸つて來た。私は手當り次第に積みあげ、また慌しく潰し、また慌しく築きあげた。新しく引き抜いてつけ加へたり、取り去つたりした。奇怪な幻想的な城が、その度に赤くなつたり青くなつたりした。

やつとそれは出來上つた。そして輕く跳りあがる心を制しながら、その城壁の頂きに恐る恐る櫛櫛を据ゑつけた。そしてそれは上出來だつた。

見わたすと、その櫛櫛の色彩はガチャガチャした色の諧調をひつそりと紡錘形の身體の中へ吸収してしまつて、カーンと冴えかへつてゐた。私は埃つばい丸善の中の空氣が、その櫛櫛の周圍だけ變に緊張してゐるやうな氣がした。私はしばらくそれを眺めてゐた。

不意に第二のアイディアが起つた。その奇妙なたくらみは寧ろ私をきよつとさせた。

——それをそのままにしておいて私は、何喰はぬ顔をして外へ出る。——

私は變にくすぐつたい氣持がした。「出て行かうかなあ。さうだ出て行かう」そして私はすたすた出て行つた。

變にくすぐつたい氣持が街の上の私を煩笑させた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆彈を仕掛けて來た奇怪な惡漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆發をするのだつたらどんなに面白いだらう。

私はこの想像を熱心に追求した。「さうしたらあの氣詰りな丸善も木葉みぢんだらう」

そして私は活動寫眞の看板畫が奇體な趣きで街を彩つてゐる京極を下つて行つた。

(大正十四年一月「青空」)

城のある町にて

ある午後

「高いとこの眺めは、アアッ(と咳をして)また格段でござすな」片手に洋傘、片手に扇子と日本手拭を持つてゐる。頭が綺麗に禿げてゐて、カンカン帽子を冠つてゐるのが、まるで栓をはめたやうに見える。——そんな老人が朗らかにさう云ひ捨てたまま峻の脇を歩いて行つた。云つておいて此方を振り向くでもなく、眼はやはり遠い眺望へ向けたままで、さもやれやれといった風に石垣のはなのベンチへ腰をかけた。——

町を外れてまだ二里ほどの間は平坦な縁。I 灣の濃い藍がそれの彼方に擴つてゐる。裾のぼやけた、そして全體もあまりかつきりしない入道雲が水平線の上に靜かに蟠つてゐる。——

「ああ、さうですな」少し間誤つきながらさう答へた時の自分の聲の後味がまだ喉や耳のあたりに残つてゐるやうな氣がされて、その時の自分と今の自分が變にそぐはなかつた。なんの拘りもしらないやうなその老人に對する好意が頬に刻まれたまま、峻はまた先程の靜かな展望のなかへ吸ひ込まれて行つた。——風が少し吹いて、午後であつた。

一つには、可愛盛りで死なせた妹のことを落ちついて考へてみたいといふ若者めいた感慨から、峻はまだ五七日を出ない頃の家を出

此の地の姉の家へやつて来た。
ほんやりしてゐて、それが他處の子の泣聲だと氣がつくまで、死んだ妹の聲の氣持がしてゐた。

「誰れだ。暑いのに泣かせたりなんぞして」

そんなことまで思つてゐる。

彼女がこゝ切れた時よりも、火葬場での時よりも、變つた土地へ來てするこんな經驗の方に「失つた」といふ思ひは強く刻まれた。

「たぐさんの蟲が、一匹の死にかけてゐる蟲の周圍に集つて、悲しんだり泣いたりしてゐる」と友人に書いたやうな、彼女の死の前後の苦しい經驗がやつと薄い面紗のあちらに感ぜられるやうになつたのも此の土地へ來てからであつた。そしてその思ひにも落ちつき、新らしい周圍にも心が馴染んで來るに隨つて、峻には珍らしく靜かな心持がやつて來るやうになつた。いつも都會に住み慣れ、殊に最近の心の休む隙もなかつた後で、彼はなほさらこの靜けさの中で恭恭しくなつた。道を歩くのにも出来るだけ疲れないやうに心掛ける。棘一つ立てないやうにしよう。指一本詰めないやうにしよう。ほんの些細なことがその日の幸福を左右する。——迷信に近いほどそんなことが思はれた。そして早の多かつた夏にも雨が一度來、二度來、それがあがる度に稍と秋めいたものが肌に觸れるやうに氣候もなつて來た。

さうした心の靜けさとかすかな秋の先驅は、彼を部屋の中の書物や妄想にひきとめてはおかなかつた。草や蟲や雲や風景を眼の前へ据ゑて、祕かに抑へて來た心を燃えさせる、——ただそのことだけが仕甲斐のあることのやうに峻には思へた。

「家の近所にお城跡がありまして峻の散歩には丁度良いと思ひます」姉が彼の母の許へ寄來した手紙にこんなことが書いてあつた。着いた翌日の夜、義兄と姉とその娘と四人で初めて此の城跡へ登つた。早のためうんかがたくさん田に湧いたのを除蟲燈で殺してゐ

る。それがもうあと二三日だからといふので、それを見にあがつたのだつた。平野は見渡す限り除蟲燈の海だつた。遠くになると星のやうに瞬いてゐる。山の峽間がぼうと照らされて、そこから大河のやうに流れ出てゐる所もあつた。彼はその異常な光景に昂奮して涙ぐんだ。風のない夜で涼み旁がた見物に來る町の人びとで城跡は賑はつてゐた。闇のなかから白粉を厚く塗つた町の娘達はしやいだ眼を光らせた。

今、空は悲しいまで晴れてゐた。そしてその下の町は薨を並べてゐた。

白聖の小學校。土藏作りの銀行。寺の屋根。そして其處此處、西洋菓子の中に詰めてあるカンナ屑めいて、緑色の植物が家々の間から萌え出てゐる。或る家の裏には芭蕉の葉が垂れてゐる。絲杉の巻きあがつた葉も見える。重ね綿のやうな恰好に刈られた松も見える。みな黴んだ下葉と新らしい若葉で、いい風な緑色の容積を造つてゐる。

遠くに赤いポストが見える。

乳母車なんとかと白くベンキで書いた屋根が見える。

日をうけて赤い切地を張つた張物板が、小さく屋根瓦の間に見える。——

夜になると火の點いた町の大通りを、自轉車でやつて來た村の青年達が、大勢連れで遊廓の方へ乗つてゆく。店の若い衆なども浴衣がけで、書見の時とはまるで異つた風に身體をくねらせながら白粉を塗つた女をからかつてゆく。——さうした町も今は屋根瓦の間へ挟まれてしまつて、そのあたりに襦袢をたくさんたてて芝居小屋がそれと察しられるばかりである。

西日を除けて、一階も二階も三階も、西の窓をすつかり日覆をした旅館が稍と近くに見えた。何處からか材木を叩く音が——もともと高くもない音らしかつたが、町の空へ「カーン、カーン」と反響

した。

次々と止まるひまなしにつくつく法師が鳴いた。「文法の語尾の變化をやつてゐるやうだな」ふとそんなに思つてみて、聞いてゐると思ひに興が乗つて來た。「チュクチュクチュク」と始めて「オーシ、チュクチュク」を繰り返す。そのうちにそれが「チュクチュク、オーシ」になつたり「オーシ、チュクチュク」にもどつたりして、しまひに「スットコチーヨ」「スットコチーヨ」になつて「チー」と鳴きやんでしまふ。中途に横から「チュクチュク」と始めるのが出て來る。するとまた一つのは「スットコチーヨ」を終つて「チー」に移りかけてゐる。三重、四重、五重にも六重にも重つて鳴いてゐる。

峻は此の間、やはりこの城跡のなかにある社の櫻の木で法師蟬が鳴くのを、一尺ほどの間近で見た。華車な骨に石鹼玉のやうな薄い羽根を張つた、身體の小さい昆虫に、よくあんな高い音が出るものだ、驚きながら見てゐた。その高い音と關係があると云へば、ただその腹から尻尾へかけての伸縮であつた。柔毛の密生してゐる、節を持つた、その部分は、まるでエンゼンの或る部分のやうな正確さで動いてゐた。——その時の恰好が思ひ出せた。腹から尻尾へかけてのブリッとした膨らみ。隅ずみまで力では切つたやうな伸び縮み。——そしてふと蟬一匹の生物が無上に勿體ないものだといふ氣持に打たれた。

時どき、先程の老人のやうにやつて來ては涼をいれ、景色を眺めてはまた立つてゆく人があつた。

峻が此處へ來る時によく見る、亭の中で晝寝をしたり海を眺めたりする人がまた來てゐて、今日は子守娘と親しうに話をしてゐる。

蟬取竿を持つた子供があちこちする。蟲籠を持たされた兒は、時どき立ち留つては籠の中を見、また竿の方を見ては小走りに隨いてゆく。物を云はないであつて變に芝居のやうな面白さが感じられ

る。

またあちらでは女の子達が米、つきば、たを捕へては、「ねぎさん米つけ、何とか何とか」と云ひながら米をつかせてゐる。ねぎさんといふのは此の土地の言葉で神主のことを云ふのである。峻は善良な長い顔の先に短い二本の觸覺を持つた、さう思へばいかにも神主めいたが、女の子に後脚を持たれて身動きならぬままに米をつくその恰好が呑氣なものに思ひ浮んだ。

女の子が追ひかける草のなかを、ばつたは二本の脚を伸し、日の光を羽根一ぱいに負ひながら、何匹も飛び出した。

時どき烟を吐く煙突があつて、田野はその邊から展げてゐた。レムブラントの素描めいた風景が散らばつてゐる。

動い木立。百姓家。街道。そして青田のなかに襦袢の煉瓦の煙突。

小さい輕便が海の方からやつて來る。

海からあがつて來た風は輕便の煙を陸の方へ、その走る方へ吹きなびける。

見てゐると煙のやうではなくて、煙の形を逆に固定したまま玩具の汽車が走つてゐるやうである。

サ、サ、と日が翳る。風景の顔色が見る見る變つてゆく。

遠く海岸に沿つて斜に入り込んだ入江が見えた。——峻は此の城跡へ登る度、幾度となくその入江を見るのが癖になつてゐた。

海岸にしては大きい立木が所どころ繁つてゐる。その蔭にちよつびり人家の屋根が覗いてゐる。そして入江には舟が舫つてゐる氣持。

それはただそれだけの眺めであつた。何處を取り立てて特別心を惹くやうなところはなかつた。それでゐて變に心が惹かれた。

なにかある。ほんたうになにかがそこにある。といつてその氣持を口に出せば、もう空ぞらしいものになつてしまふ。

例へばそれを故のない淡い憧憬といつた風の氣持、と名づけてみ

ようか。誰れかが「さうぢやないか」と尋ねてくれたとすれば彼はその名づけ方に賛成したかも知れない。然し自分では「まだなにか」といふ氣持がする。

人種の異つたやうな人びとが住んでゐて、此の世と離れた生活を營んでゐる。——そんなやうな所にも思へる。とはいへそれはあまりお伽話めかした、びつたりしないところがある。

なにか外國の畫で、彼處に似た所が書いてあつたのが思ひ出せないためではないかとも思つてみる。それにはコンステイブルの畫を一枚思ひ出してゐる。やはりそれでもない。

では一體何だらうか。このパノラマ風の眺めは何に限らず一種の美しさを添へるものである。然し入江の眺めはそれに過ぎてゐた。そこに限つて氣韻が生動してゐる。そんな風に思へた。

空が秋らしく青空に澄む日には、海はその青より稍々濃い深青に映つた。白い雲がある時は海も白く光つて見えた。今日は先程の入道雲が水平線の上へ擴つてザボンの内皮の色がして、海も入江の眞近までその色に映つてゐた。今日も入江はいつものやうに謎をかくして靜まつてゐた。

見てゐると、獸のやうにこの城のはなから悲しい唸り聲を出してみたいやうな氣になるのも同じであつた。息苦しいほど妙なものに思へた。

夢で不思議な所へ行つてゐて、此處は來た覺えがあると思つてゐる。——丁度それに似た氣持で、えたいの知れない想ひ出が湧いてゐる。

「あゝかゝる日のかゝるひととき」

「あゝかゝる日のかゝるひととき」

何時用意したとも知れないそんな言葉が、ひらひらとひらめいた。

「ハリケンハッチのオートバイ」

「ハリケンハッチのオートバイ」

先程の女の子らしい聲が峻の足の下で次々に高く響いた。丸の内街道を通つてゆくらしい自動自転車の爆音がきこえてゐた。

この町のある醫者がそれに乗つて歸つて來る時刻であつた。その爆音を聞くと峻の家の近所にある女の子は我れ勝ちに「ハリケンハッチのオートバイ」と叫ぶ。「オートバ」と云つてゐる兒もある。三階の旅館は日覆をいつの間にか外した。

遠い物干臺の赤い張物板ももう見つからなくなつた。

町の屋根からは煙。遠い山からは蝸。

手品と花火

これはまた別の日。

夕飯と風呂を済ませて峻は城へ登つた。

薄暮の空に、時どき、數里離れた市で花火をあげるのが見えた。氣がつくと綿で包んだやうな音がかすかにしてゐる。それが遠いので間の抜けた時に鳴つた。いいものを見る、と彼は思つてゐた。

ところへ十七ほどを頭に三人連れの男の兒が來た。これも食後の涼みらしかつた。峻に氣を兼ねてか靜かに話をしてゐる。

口で教へるのにも氣がひけたので、彼はわざと花火のあがる方を熱心なふりをして見てゐた。

末遠いパノラマのなかで、花火は星水母^{くもづつ}ほどのさやけさに光つては消えた。海は暮れかけてはゐたが、その方はまだ明るみが残つてゐた。

暫くすると少年達もそれに氣がついた。彼は心の中で喜んだ。

「四十九」

「ああ四十九」

そんなことを云ひあひながら、一度あがつて次のあがるまでの時問を數へてゐる。彼はそれらの會話をきくともなしに聞いている。

「××ちゃん、花は」

「フロラ」一番年のいつたのがそんなに答へてゐる。――

城でのそれを憶ひ出しながら、彼は家へ歸つて來た。家の近くまで來ると、隣家の人が峻の顔を見た。そして慌てたやうに、

「歸つておいでなしたぞな」と家へ云ひ入れた。

奇術が何とか座にかかつてゐるのを見にゆかうかと云つてゐたのを、峻がぼつと出てしまつたので騒いでゐたのである。

「あ。どうも」と云ふと、義兄は笑ひながら、

「はつきり云ふとかんのがいかなのやき」と姉に背負はせた。姉も笑ひながら衣服を出しかけた。彼が城へ行つてゐる間に姉も信子（義兄の妹）もこつてり化粧をしてゐた。

姉が義兄に、

「あんた、扇子は？」

「衣囊にあるけど……」

「そうやな。あれも汚れてますで……」

姉が合點合點などしてゆつくり捜しかけるのを、じゆうじゆうと音をさせて煙草を喫んでゐた兄は、

「扇子なんかどうでもええわな。早う仕度しやんし」と云つて煙管の詰まつたのを氣にしてゐた。

奥の間で信子の仕度を手傳つてやつてゐた義母が、

「さあ、こんなは奈何やな」と云つて團扇を二三本寄せて持つて來た。砂糖屋などが配つて行つた團扇である。

姉が種々と衣服を着こなしてゐるのを見ながら、彼は信子がどんな心持で、またどんな風で着附をしてゐるだらうなど、奥の間の氣配に心をやつたりした。

やがて仕度が出來たので峻はさきへ下りて下駄を穿いた。

「勝子（姉夫婦の娘）がそこらにゐますで、よぼつてやつとくなさ」と義母が云つた。

袖の長い衣服を着て、近所の子等のなかに雜つてゐる勝子は、呼

ばれたまま、まだなにか云ひあつてゐる。

「『カ』ちうとこへ行くの」

「かつどうや」

「活動や、活動やあ」と二三人の女の子がはやした。

「ううん」と勝子は首をふつて

「『ヨ』ちつとこへ行くの」とまたやつてゐる。

「ようちえん？」

「いやらし、幼稚園、晩にはあれへんわ」

義兄が出て來た。

「早うお出でな、放つといてゆくぞな」

姉と信子が出て來た。白粉を濃くはいた顔が夕闇に浮んで見えた。さつきの團扇を一つづつ持つてゐる。

「お待ち遠さま。勝子は。勝子、扇持つてるか」

勝子は小さい扇をちらと見せて姉に纏ひつきかけた。

「そんならお母さん、行つて來ますで……」

姉がさう云ふと、

「勝子、歸ろ歸ろ云はんのやんな」と義母は勝子に云つた。

「云はんのやんな」勝子は返事のかはりに口眞似をして峻の手のなかへはいつて來た。そして峻は手をひいて歩き出した。

往來に涼み臺を出してゐる近所の人びとが、通りすがりに、今晚は、今晚は、と聲をかけた。

「勝ちゃん此處何でとこ？」彼はそんなことを訊いて見た。

「しやうせんかく」

「朝鮮閣？」

「ううん、しやうせんかく」

「朝鮮閣？」

「しやうーせんーかく」

「朝ー鮮ー閣？」

「うん」と云つて彼の手をびしやと叩いた。